南コーカサス地方のネアンデルタール人
―アゼルバイジャン第14次発掘調査(2023年)―

西秋　良宏　東京大学総合研究博物館教授
アザド　ゼイナロフ　国立科学アカデミー考古学民族学人類学研究所研究員
ヤコブ　ママドフ　国立科学アカデミー考古学民族学人類学研究所研究員
仲田　大人　青山学院大学文学部講師

Neanderthals in the Southern Caucasus: The 2023 Investigations at Middle Palaeolithic Caves of Azerbaijan

NISHIAKI, Yoshihiro　Professor, The University of Tokyo, Japan
ZEYNALOV, Azad　Researcher, IAEA, ANAS, Azerbaijan
MAMMADOV, Yaquv　Researcher, IAEA, ANAS, Azerbaijan
NAKATA, Hiroto　Lecturer, Aoyama-Gakuin University, Japan

1. はじめに

東京大学総合研究博物館によるアゼルバイジャンの現地調査は2008年に始まった。目的は、南コーカサス地方における新石器化のプロセスの研究であった。古くから新石器文化(Eneolithicと呼ばれていた)の存在は知られていたが、それがいつ、どのようにできあがったのかは、2000年代当時、皆目わかっていなかった。そこにメスを入れようとしたのである。結果として、ギョイテペ(2008～2013)、ハッジ・エラムハンル(2012～2015)、ダムジリ(2016～2022)という中石器時代後半から新石器時代半ばにまたがる三遺跡の発掘が実現し、地元狩猟採集社会が食料生産経済社会に移行するプロセスを編年的に描き出すことに成功した(Nishiaki and Guliyev 2020；Nishiaki et al. 2021；Nishiaki et al. n.d.)。

これは大きな成果だと自負するものである。では、次の研究は何か。現地調査15年をへて視点を変え、ネアンデルタール人問題、つまり、ヨーロッパ旧人集団のアジアへの展開や絶滅の経緯を考古学的に調べることとした。このテーマは、筆者が長くレヴァント地方やイラン、ウズベキスタンなどで取り組んできた課題でもある。

西アジア一帯は、アフリカ、アジア、ヨーロッパ三大陸の交差点にあたる。そこは、先史時代においても人類集団の接触、融合、交替の場でもあった。その場合の回廊(corridor)は二つある。一つは、レヴァント回廊、つまり地中海と内陸沙漠にはさまれた南北にせまい地域である。それが南北の回廊をなすことは周知であり、イスラエルやシリア、ヨルダンなどで集中的な調査がおこなわれてきた。一方、もう一つは南コーカサス回廊である。黒海、カスピ海、そしてその間にそびえるコーカサス山脈は南北移動をはばむヨーロッパとアジアの境界である。しかし、その南の南コーカサス地方は、ヨーロッパとアジアの移動を可能にする東西回廊を提供している。そこにレヴァント地方とは異なる人類模様が展開していたとして不思議はない。当地の旧石器時代遺跡を私たちの次の研究課題とすることにした。

実は、この課題は、これまでの新石器時代研究においても触れてきたところである。なぜなら、ダムジリ洞窟の最下層ではネアンデルタール時代の旧石器が出土しており、私たちの関心を惹いてきたからである。これをふまえ、2023年度のシーズンにおいては、ダムジリ洞窟の調査とりまとめをおこなうとともに、アゼルバイジャンにおける既知の旧石器時代洞窟のいくつかを訪問し(**図1**)、中期旧石器時代研究に適した候補地を探す野外調査を実施した。期間は8月18日から9月3日までの約2週間である。

2. 2023年度の野外調査

(1)ダムジリ洞窟

洞窟はアゼルバイジャン西部、ガザフ県のアベイ山麓にある。標高は約650 m。高さ数十メートルの石灰岩崖の基部に位置している。雨水がもたらした滝壺洞窟である。したがって、滝壺直下では考古学的な堆積

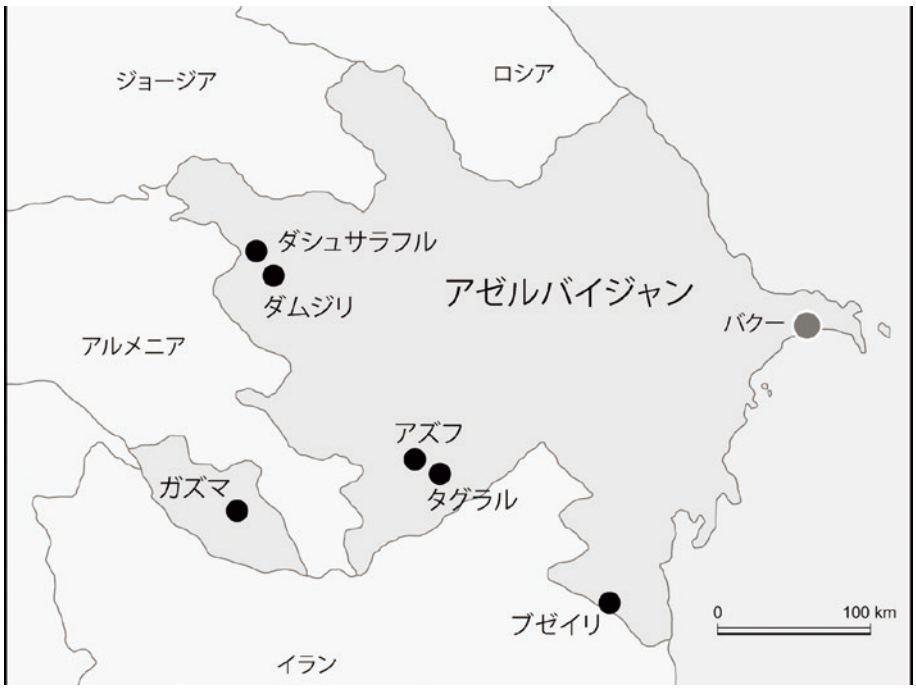

図1　関係遺跡の位置

がいちじるしい攪乱を受けているが、そこから離れた箇所に設けたトレンチにて良好な文化堆積が残されていた。

今年度は2022年までの発掘成果のとりまとめが主目的であったから、新たな発掘調査はおこなっていない。ただし、コロナ禍で中断していた現地説明会を2019年以来、4年ぶりに実施した（**図2**）。そのため、これまでの発掘区のクリーニングを実施し来跡者への配慮とした。また、私たちが発掘する前、ダムジリ洞窟は1950年代にも発掘がなされており、最初の調査は1953年になされている。2023年は70周年にあたることを記念し、公開講演会を実施することができた。学術的な調査とりまとめは英文モノグラフの刊行とするつもりであるが、これらのイベントは地元のみなさんに成果を説明する貴重な機会となった。

図2　ダムジリ洞窟説明会

(2)ダシュサラフル洞窟

ダムジリ洞窟が位置するアベイ山麓の、もう一つの洞窟遺跡、ダシュサラフルの調査をおこなった。この洞窟は、ダムジリを調査したM.フセイノフが1958年に発掘した中期旧石器時代遺跡である。ダムジリ洞窟の西、約1kmの地にある。先年、隣国アルメニアとの国境紛争が落着したことをもって、ようやく調査が可能になった。

フセイノフの記述によれば、約1.5mほど後世の堆積があり、その下にわずか30～35cmの中期旧石器時代文化層が岩盤上で見つかったという。奥行き2mほどに拡がる炉跡が見つかったという興味深い記述も残されている。

この洞窟を再訪し、中期旧石器時代についてのさらなる調査の可能性を探った。30年以上ものアルメニア紛争期間中、立ち入りが制限されていた地域にあるためアベイ山の西麓はジャングルになっていた。したがって、洞窟同定には難儀したが、再訪に成功した。

改めて洞窟を測量したところ、洞窟のサイズは、開口部の幅が約5m、洞奥では約2m、全長約12m。テラス部の拡がりは最大5mほどであった。これらの計測値はフセイノフの記載と合致している。一方、堆積が認められたテラス部を中心に発掘調査もおこ

図3 ダシュサラフル洞窟調査

図4 タグラル洞窟調査

図5 アズフ洞窟遠景

なった(**図3**)。堆積の厚さは最大で40 cmほどあったが、攪乱層であった。すなわち、元来の文化層は1958年の発掘によって、ほぼ完全に除去されていると考えられた。洞窟壁には岩盤から1.5〜2 mのところに明瞭な風化面の違いがみられた。1958年、発掘前には、そこまで文化層があったのであろう。岩盤から20〜30 cm上にも黒色のタール付着面が見いだされた。フセイノフが言う中期旧石器時代の火使用痕跡と思われた。

結論として、ダシュサラフルは再調査できる可能性は低い。一方、フセイノフの発掘に関する記述は現在の知見でも正しいことも確認できた。これをもとに、野外調査は終了し、当時の出土石器群の再分析を実施した。

(3)タグラル洞窟

上記、二つの洞窟は小コーカサス山脈北西、カザフ県に位置するものだが、タグラル洞窟は、南東部、ホジャヴェンド県に位置する。フィズリ市の西方約20 kmに開口している。1960年代から80年代までアゼルバイジャン研究者によって調査された。その後、アルメニアによる占領時代にも、2000年代初めまで断続的な調査がなされた。堆積は厚さ6〜7 mあり、最上層の第I層が完新世以降の攪乱層、第II層が後期旧石器、III層以下岩盤上のVI層までの地層は中期旧石器時代であると報告されている。

これまでの記載によれば、洞窟内堆積の約2/3が発掘済みとのことである。今回の再調査においては、いわゆるメインセクションのクリーニングをおこなった(**図4**)。その過程で多くのムステリアン石器、動物化石が出土したことから、本格的な再調査を実施する価値があると判断した。層序を調べ直し、年代測定用サンプルも多数、採取した。ムステリアンの年代的変遷だけでなく、第II層の文化的位置づけは極めて興味深い。後期旧石器時代に比定されているからである。南コーカサスで中期旧石器時代と後期旧石器時代が重層している遺跡はほとんどないため、その間の文化的継起を調べる格好の遺跡ともなりえよう。

(4)アズフ洞窟

この洞窟は、おそらくアゼルバイジャンで最もよく知られている旧石器時代遺跡である(**図5**)。巨大洞窟であり、かつ、前期旧石器時代後半の地層(第V層)から原人ハイデルベゲンシス、中期旧石器時代層(第III層)からは旧人ネアンデルタール人の化石人骨が出土している。

洞窟は、タグラル洞窟の西、約3 kmほどのところにある。アズフ村を見下ろすカルスト崖に開口している。1960年から1982年までフセイノフが集中的な発掘調査をおこなった。その後、占領時代にスペイン・アルメニアの合同調査団も追加調査を実施している(Fernandez et al. 2016)。それにより、約120万年前以降、現代にいたるまでの長大な文化的堆積が本洞窟

に残されていることが明らかにされている。

洞窟はアズフⅠからⅩまである。今回は、最重要のⅠ号洞窟を踏査した。ソビエト時代の発掘で文化堆積の大部分が失われているが、なお、前期～中期旧石器時代の堆積が残されていることが理解できた。この洞窟は、いわゆるカルスト地形の鍾乳洞であり、再調査には特別な準備体制の構築が必須であることもわかった。

3. おわりに

2023年シーズンはダムジリ洞窟の調査完了のための補足調査と遺物整理、および、次の展開のために他の中期旧石器時代遺跡を訪問することが主たる目的であった。いずれにおいても十分な成果があがった。ダムジリ洞窟の調査成果は近々に書籍として出版されるはずである。一方、次の遺跡の調査についてはタグラル洞窟を最重点候補として認定し、サンプル採取を実施した。筆者らはレヴァント地方を中心に、この種の遺跡調査につき多年の経験をつんできた。その成果をもって、南コーカサスのネアンデルタール人問題について、新たな光をあてることができるのではないかと期待している。また、タグラル洞窟は、アズフ洞窟の近隣にあって、両者ともども、アゼルバイジャン共和国はユネスコの世界遺産暫定リストに揚げているところである。その進展に協力することもふくめて、調査計画をすすめていく所存である。

2023年度の調査および成果のとりまとめは、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究「南コーカサス地方におけるネアンデルタール人の絶滅年代にかかわる考古学的研究」（課題番号23H00690）、三菱財団人文科学研究助成「コーカサス地方における初期人類展開の考古学的研究」（課題番号202320018）その他によって実施した。

■参考文献

- Fernández-Jalvo, Y., T. King, L. Yepiskoposyan and P. Andrews 2016 *Azokh Cave and the Transcaucasian Corridor*. Springer International Publishing.
- Nishiaki, Y. 2023 Research at Damjili Cave (2015–2023). *Symposium Commemorating the 70th Anniversary of the Excavations at Damjili Cave*, The Heydar Aliyev Center, Gazakh, Azerbaijan, August 28, 2023.
- Nishiaki, Y. 2023 The Mesolithic-Neolithic transition at Damjili Cave, Gazakh: The 2015–2023 Research. *Special Lecture*. The Institute of Archaeology, Ethnography, and Anthropology, Baku, Azerbaijan, December 27, 2023.
- Nishiaki, Y., A. Zeynalov, and Y. Mammadov (n.d.) *Damjili Cave - Investigating the Late Pleistocene to Holocene Human History in the Southern Caucasus*. In prep.
- Nishiaki, Y. and F. Guliyev 2020 *Göytepe - The Neolithic Excavations in the Middle Kura Valley, Azerbaijan*. Oxford: Archaeopress.
- Nishiaki, Y., F. Guliyev and S. Kadowaki 2021 *Hacı Elamxanlı Tepe - The Archaeological Investigations of an Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan*. Berlin: ex oriente.
- 西秋良宏　2023「南コーカサス中石器・新石器時代の幾何学形細石器」『日本西アジア考古学会第28回総会・大会要旨集』33–34頁　日本西アジア考古学会。
- 西秋良宏・ヤコブ ママドフ・ウルビア ヘイダロヴァ・三木健裕・仲田大人・若野友一郎・新井才二・池山史華・田辺勘太郎・宮井しづか　2023「南コーカサス地方の新石器時代―アゼルバイジャン第13次発掘調査（2022年）」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』18–21頁　日本西アジア考古学会。